THE 葬祭関連資格プロファイル

file 009 ●●●> 終活カウンセラー

ここ２年ほどの「終活」という言葉の浸透ぶりは、驚くべきものがある。
本来は、「葬儀や墓の準備」「死の準備」等の活動や考え方を指すものだが、ここにきて「よりよい生」を考えるためのもの、という意識も広まりつつあるといえる。
この終活をいち早く資格名として取り入れたのが、終活カウンセラー協会®が取り組む「終活カウンセラー」である

資格ありきではなく 終活を広めるために構想化

いまでこそ普通に使われるようになった「終活」という言葉だが、登場した2009年頃は、知る人ぞ知る言葉であった。

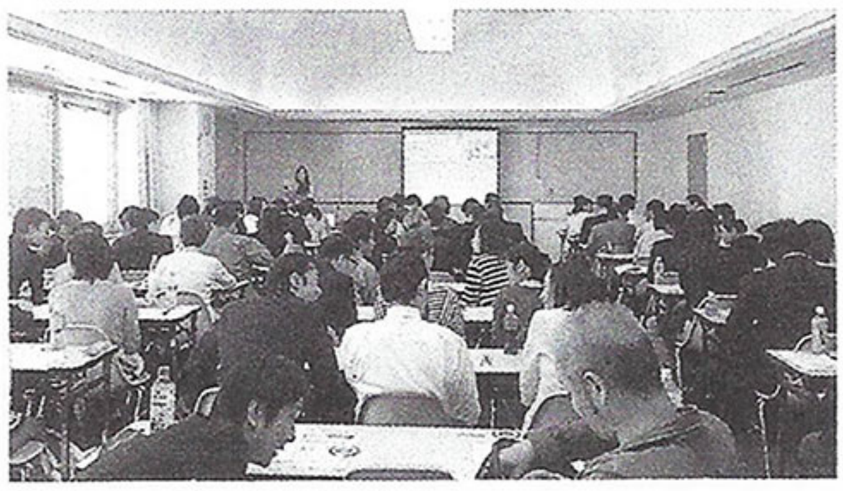
そうしたなか、東京都品川区に東京本部を構える一般社団法人終活カウンセラー協会代表理事の武藤頼胡氏はこの言葉に出会った瞬間、その必要性をすぐさま感じ取ったという。当時、葬儀セミナー等の運営に携わっていた武藤氏は、葬儀セミナーに参加している人のニーズが葬儀だけでなく、死を迎えるための準備に関する広範な相談にあると痛感していたからだ。

いつかは必ず訪れる死に向けて、こんなにも不安を抱え、相談できる相手を求める人がいる。来たるべき超高齢社会、ひいては多死社会に向けて、死への準備を通じて人生を見つめ直し、残された限りある生を、より自分らしく充実して過ごすための活動＝終活は大切なこと。そう考えた武藤氏は、10年８月、「終活カウンセラー」と自ら名乗り、手づくりのWebサイトを立ち上げた。このサイトはSEO対策などをまったくしなかったにもかかわらず、１年で90件ほどの反響があった。問合せの内容は、「終活とは一体なんなのか」というものがほとんどだったが、そこに武藤氏は将来性を予見できる手応えを感じたという。

今後、この終活をきちんと形を整え、本当に一般消費者が必要とするものにしていくためにはどうしたらいいのか。宣伝やPRに多大な費用はかけられない。そこで考え出したのが、１人で取り組まずに、組織化したうえで資格制度をつくることだった。

11年３月から構想・準備にかかり、企画書を手に、個人的なネットワークを活かして弁護士らに声をかけた結果、５人が新規事業に賛同。４か月後の７月、試験を実施する機関として一般社団法人を立ち上げ、10月に第１回目の初級講座を開講した。

第１回目の初級講座を開講するにあたっては、定員80人の会議室を借り、フェイスブックや知人の伝手など、費用をかけない形で60人の受講者（取得者）を集めた。葬祭事業者、保険関係者、経営者など、仕事に活用したり情報収集などを意識しているであろう受講者が多く、年代は50歳代が中心で、男女比はほぼ半々だった。



92人が申し込んだ大阪での受講風景（2014年５月11日）。正面の講師は武藤頼胡代表理事

終活カウンセラー

開始年●2011年（初級）
実施機関●一般社団法人 終活カウンセラー協会®
等級区分●上級インストラクター 上級／初級
受講者数●約6,500人（初級）

２回目は翌12年２月に受講者60人で実施し、７月には３回目の講座を予定するなど順調な滑り出しだった。そんなさなか、５月にテレビ番組で「終活事情」が紹介されたことで、約1,500件の問合せメールが協会に殺到。受付開始からわずか１分間で65人分が満席になるという猛烈なスピードで埋まり、急遽、開講した９月の講座85人分もすぐに満席となった。

この勢いを世間に知らしめたのが、この年、「終活」が新語・流行語大賞の年間トップテン入りしたことだった。

延べ6,500人にのぼる 初級カウンセラー

終活カウンセラーには、初級と上級、上級インストラクターの３つの等級区分がある。資格ありきではなく

終活の意味や意義を知り、生き方に役立てるという開設目的に則り、初級から順を追って学んでいくことを条件とした。

初級講座に申し込み、費用を支払うとテキスト（A４判88頁）と終活準備ノート、過去問が送られてくる。受講の前にテキストで予習し、終活準備ノートに記入することで、これまでの人生を棚卸ししてから１日の講座に臨む。講座の最後には25分の小テストがあり、30問の設問に答えて簡単なレポートを提出、合格すれば初級カウンセラーとなる。合格率は95％程度だ。

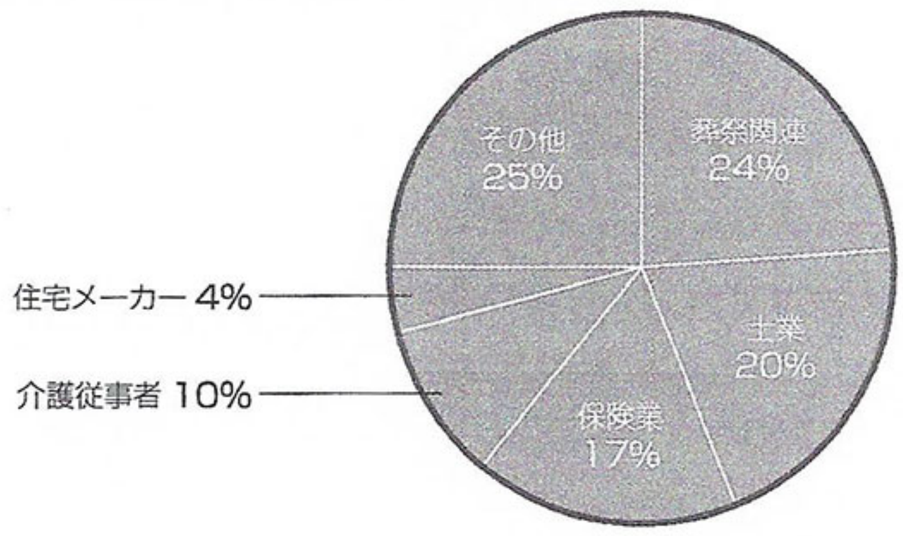
講義の内容は終末医療からエンディングノート、遺言、葬儀、墓、相続、グリーフケアに関することなど多岐にわたる。受講料は税込み9,070円（昼食・テキスト代込み）。合格した後、終活カウンセラーの名称を名刺などに刷り込んだり、掲示したりするには、3,888円（324円×12か月分、税込み）の年会費を支払って協会の会員になることが条件である。

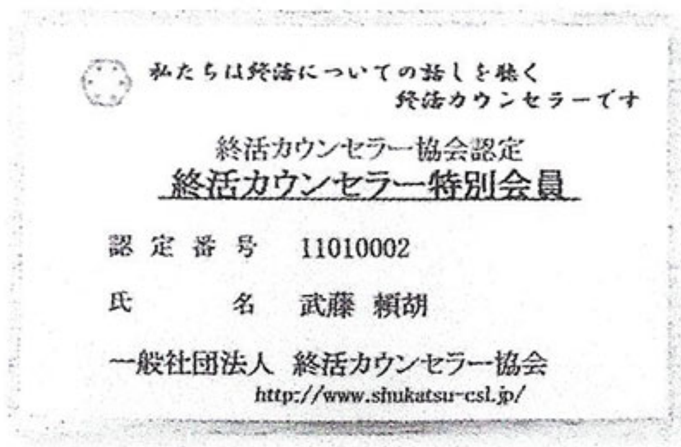
初級講座はこれまでに全国で60回以上開講しており、受講者は延べ6,500人にのぼる。そのうちの24％が葬祭関連で最も多く、次いで士業20％、保険業17％と続く（**図表**）。年代的には50歳代37％、60歳代24％、40歳代25％と、40～60歳代で９割近くを占める。

高位等級となる上級カウンセラーは、12年10月にはじまった。現在、372人が認定を受けており、事前審査や事前のレポート提出を経たのち、２日間受講（受講料３万2,400円、税込み）して得る。事前審査でしっかりと適性が判断されるため、100人程度の応募者がありながら合格者は80人程度にとどまるという。

さらに高位等級となる上級インストラクターも、13年12月に新設した（受講料10万8,000円、税込み）。協会からの依頼をとおして、初級カウンセラーの講義インストラクターを務められるようになるのが上級インストラクターである。現在の有資格者は17人、うち２人は葬祭事業者だという。

図表　受講者（初級）の職業別割合




私たちは終活についての話しを聴く
終活カウンセラーです

終活カウンセラー協会認定
終活カウンセラー特別会員

認定番号　11010002
氏　　名　武藤 頼胡

一般社団法人 終活カウンセラー協会
http://www.shukatsu-csl.jp/

会員証。左上にある協会のロゴマークは、立ち上げ時に集った６人の輪を示す円陣をモチーフにしている

受講者１万人を目標に広がるコミュニティの輪

資格をスタートしてから３年強が経ったいま、協会が目標に掲げる受講者は１万人である。

終活を取り巻く世論や環境も大きく変わり、いまでは当初主流だった「仕事への活用」を目的とした受講者のみならず、主婦や学生、高齢者など、「自身のため」の受講も多い。これは、１人ひとりが人生のエンディングを考えることで、よりよい生を送るという協会の当初の目的に適った歩みといえるだろう。

さまざな属性をもつ受講者がふえるなか、協会では受講者同士の横のつながりを大切にしたいと考え、受講時に挨拶タイムを設けている。受講料に昼食代が含まれるのも、「共食」の感覚を大事にしたいという理由から。その甲斐もあって、いまでは受講者同士の間に終活コミュニティともいうべき強固なつながりができているそうだ。

協会には現在、東京本部以外に直営の大阪支社（大阪市中央区）を設けているほか、半年ほど前には理念をともにする協力会社が運営する福岡支部（福岡市博多区）を開設した。協会では、今後、全国に支部をふやしていく予定だが、あくまで理念の共有にこだわり、拠点をふやすのを目的とした急激な事業展開は考えていない。

自分の人生の総仕上げともいうべき終活が関わる範囲は広い。そのため、考えるほどに疑問や不安が広がるという人がほとんどだ。そのなかでコンシェルジュのような存在となってトータルに話を聞き、法律や税務、葬儀などそれぞれの専門家の橋渡しを果たす終活カウンセラーは、真に必要とされる存在である。

葬祭事業者にとっても、事前相談に導入することはもちろん、一般消費者が会館などに気軽に足を運んで話をしてもらえるようになるためにも、この資格がもつ意味は大きいといえるだろう。